

(科学研究費補助金「諏訪湖・天竜川水系の物質循環、水循環とマネーフローからの研究」最終報告)

諏訪湖・天竜川プロジェクトのさらなる発展を願って

2000年に学長裁量経費で始められた、通称「諏訪湖・天竜川プロジェクト」も、2003年からの科学研究費補助金「諏訪湖・天竜川水系の物質循環、水循環とマネーフローからの研究」を経て、今年で通算5年を経過しました。学長裁量経費による最初の2年間は、地元「諏訪湖・天竜川水系」を流域研究の一つのケースとして取り上げた、学部横断型の、学際的プロジェクトとして立ち上げました。この学部横断型プロジェクトは、当時学長をされていた森本尚武先生の強力な支援によって実現したものでした。

学部横断型、あるいは学際的という枕詞のついたプロジェクトはいかにも格好が良いのですが、中身は絵花的な、まとまりのない研究の寄せ集めになりかねない運命を持っているプロジェクトでもあります。その理由は多分野の研究者が集まり、衆議するまでは良いのですが、その先まとめる方向で進める際には衆議一決となりにくいところにあります。それを打破するには時には独断専行することを認めるような関係者の相互信頼が必要と私自身は考えています。この「諏訪湖・天竜川プロジェクト」発足の際には一部そのような行き方を取り入れたこともありました。それが良かったか、悪かったかは関係者皆さんの評価にまかせますが、当時の各学部長諸兄の暖かな心の支援があったからこそ実現できたものです。言葉足らずではありますが、巻頭で感謝を申し述べさせていただく次第です。

水系を軸にした生態系としての空間単位でもある流域には、それぞれの流域に独特な自然環境が形成されています。その環境条件のもとで、人々は同じ環境下に生息する他の生物群集と共存して独特な暮らしをしてきました。しかし、科学技術が進歩し、人間活動が活発化するにつれて、その善し悪しは別として、同じ地域に生活する他の生物たちと人間の共存に破綻が認められるようになり、流域でも自然と人間活動の関係は大きく変わってきたように思います。その変貌を正すためには自然科学的な研究と社会科学的研究が連携して、同じテーブルの上で行われる必要があります。さらに、研究対象地域も同じであり、身近に存在すればなお都合が良いと言えます。

信州大学は蛸足大学と皮肉られ、自嘲を含めて自ら称した時期もありましたが、その立地的特徴は流域研究にとってはこの上ない利点とも言えます。キャンパスの近くには天竜川水系と千曲川水系があり、そして何よりの強みは各水系の流域に関わる自然系、社会系の研究者が数多く信州大学に在籍していることです。最初のケース・スタディーとしては農学部、理学部の研究拠点がある、歴史的にも研究歴の長い諏訪湖・天竜川流域に的を絞って研究をスタートさせましたが、これも信州大学自体の地域特性を生かしたものです。

流域研究には既存の方法論が未だ見つからないとは言えません。そこで、とりあえず、物質循環、水循環という自然と人間活動がぶつかる現象とマネーフローという人間社会特有の循環系をキーワードとしてプロジェクトのタイトルに組み入れてみました。それが正解であったか、否かは研究の先行きが見えてこないと判断できませんが、この報告書で少しでも燭光が見え、さらに歩を進めることができると期待しています。

(信州大学名誉教授 沖野外輝夫 記)